

In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University merge to Osaka Metropolitan University

Title	(異)性愛化した空間：日常空間に対するレズビアンの知覚と経験
Author	バレンタイン, ジル / 福田, 球己[訳]
Citation	空間・社会・地理思想. 3 巻, p.77-95.
Issue Date	1998
ISSN	1342-3282
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学文学部
Description	<特集>ジェンダー地理学 / Society and Space, 11, 1993, pp.395-413. / ©1997 by Pion Limited
DOI	

Placed on: Osaka City University

Osaka Metropolitan University

(異) 性愛化した空間

——日常空間に対するレズビアンを知覚と経験——

ジル・バレンタイン*

(福田 珠己** 訳)

Gill VALENTINE

(Hetero)sexing Space:

Lesbian Perceptions and Experiences of Everyday Spaces

Society and Space, 11, 1993, pp.395-413

© 1997 by Pion Limited

要約 異性愛は近代西洋文化において優位なセクシュアリティである。しかしながら、それは単に私的空間における性行為によってのみ定義されるものではなく、大部分の日常環境の中で作用している権力関係の一過程である。本稿では、レズビアンがどのように日常空間を知覚し経験しているか探求する。まず、レズビアンが職場やホテルといった環境の中で居場所がないout of placeと感じていることについて論じる。なぜなら、それらの空間は、異性愛者によって組織化・占有されており、不均衡な社会的性的関係を表現・再生産しているからである。また、反同性愛者による差別や暴力を通して、どのように異性愛ヘゲモニーが空間上に再生産・表象されるかという点についても考察していく。結論において、同性愛者であることを暴露されることや反同性愛者による嫌がらせに対する恐怖のために、日常空間の中で、レズビアンやゲイのセクシュアリティがどのような形で抑制されているか、また、そのため、異性愛の空間的ヘゲモニーがどのように育まれていくか、という点についても考察していく。

街中の土曜の朝ほどのびのびするものではありません。¹

(レズビアン、中産階級、20代)¹⁾

年齢やジェンダーが日常空間に関する個人の知覚や経験に対して多大な影響を与えていることは、地理学の文献の中で、十分に立証されていることである(Hart, 1978; Valentine, 1989)。性差が男女間の権力の不平等に起因するものであり、そのような不平等は、どのように空間がデザイン・占拠・支配されるかということに反映されているというのである。しかしながら、上記の引用が示すように、ジェンダーだけが作用して、場所を占有し支配し、他の集団による空間の利用に影響

を与えているのではない。異性愛もまた空間上に強力に表現されているのである。

公／私・二分法の神話

時代、社会、文化を限らず、同性間関係がかなりの頻度で受容されてきたという事実にもかかわらず、近代西洋文化において優越したセクシュアリティは異性愛である(D'Emilio and Freedman, 1988)。このような優越性は、男女が再生産するという生物的な本能を有しているという事実に基づいているものである。「標準的なセックス」は、それゆえ、ペニスの挿入による生殖として定義され、一夫一婦制の関係の中で起こるものと仮定されている。同性愛という用語は、19世紀終わりに、医学用語として造り出されたものである。「同

* マンチェスター大学 ** 大阪府立大学

性愛は主として医学の枠組みの中で一つの病理として見なされ、その要因は生物的な性的倒錯もしくは家族病理にあるとされ、その治療は去勢から心理分析にまで至った」(Plummer, 1988, p. 23)。今では、同性愛は精神病として取り扱われることはないが、「生殖から親密さ・個人の幸福へ、家族・コミュニティから個人へ」(Herek, 1992a, p. 93)と、セクシュアリティの役割について、社会的コンセンサスが変化してきたにもかかわらず、依然、同性間関係は恥辱的否定的なもので見られている。

異性愛は、イデオロギーとしては、ジェンダー・アイデンティティの概念、すなわち、男であること、女であることがいかなるものであるかということ(男らしさと女らしさ)について共有された信念や意味とも関係しあっている。なぜなら、異性間関係という概念が次のことを前提としているからである。第1に、男であることと女であることとの間に二分法的な区分がある、第2に、二分されたジェンダー・アイデンティティ(男らしさ-女らしさ)が、性別に二分された身体(男-女)と対応している(Butler, 1990)。

「標準的な」男らしさと女らしさは、相互の関係の中で規定されるものである。その中で、ジェンダー・アイデンティティの形成と再生産の双方が男性優位、すなわち、家父長制を生み出し永続させているのである(Coveney et al, 1984)。不均衡な(異なった性の両親からなる)家族は、定義上、異性愛的概念であり、それゆえ、子供を持つということもまた異性愛的なものとして認められるのである(Herek, 1992a)。

したがって、ゲイであるということは、性的行為や家族構成に関する規範を破壊するだけでなく、「自然な」男性的、また、女性的振る舞いという規範から逸脱することでもある。これらの規範は時と場所によって変化していくものであり、ゆえに、セクシュアリティは単に性行為によってのみ定義されるものではなく、権力関係の過程として存在しているのである(Foucault, 1988)。近代西洋社会における異性愛は、異性愛家父長制として、すなわち、男性優越性を反映し再生産する社会的性的権力関係の一過程として、描写することができる。

表向きは、セクシュアリティは家庭という私的空間に属するものであり、オフィスやレストランといった公的領域に属するものではないと思われている。この

ような考え方は、アメリカで行なわれた同性愛者に対する異性愛者の態度に関する調査結果にも表れている。同性愛者が自らのセクシュアリティをけげにしない限り、同性愛者に対して何ら反対しないという回答が、被調査者に共通して見られたのである(Herek, 1987)。このような考え方は、英国における同様の調査においても見られる。しかしながら、公的空間よりむしろ私的空間の中にセクシュアリティが位置づけられるという文化的な二分法は、異性愛もまた私的な性的行為によって定義されるものであり、公的領域において表明されるものではないという誤った前提に基づく。しかし、実際は、異性愛は婚姻や法制、税制、福祉制度において制度化され、結婚式や洗礼といった公的儀礼の中で誉め称えられているのである。このことは、公的活動/私的活動を単純に区分することが誤りであると強調している。なぜなら、異性愛は、大部分の日常の諸環境の中で明らかに優位なセクシュアリティだからである。それは、私的空間だけの問題ではなく、男女間のあらゆる関係を伴うものである。けれども、異性愛優越の「自然さ」を仮定して強調するあまり、大部分の人々はあらゆる空間において異性愛が権力関係の一過程として機能していることを忘れがちである。ところが、レズビアンであること、もしくはゲイであることは、社会の多数派である異性愛に気づき、経験することなのである。

本稿では、イングランドのある町²⁾で行なった調査結果を用い、レズビアンが日常空間(家庭、職場、社会空間、サービス環境、公共空間)をどのように認識し経験しているかを考察していく。資料は、18才から60才までの女性40人との詳細なインタビュー(録音および筆記されたもの)に基づく。彼女らは、現在、自らがレズビアンであると思っている女性で、現在レズビアン関係にあるか、もしくは女性のパートナーを求めている女性である。中には、以前は、自らを異性愛者であると思っていた女性もいる。異性愛者としての生活とゲイの生活の間に明確な断絶がある人もいるし、レズビアンだと気づきながらも男性パートナーと生活し、徐々にレズビアンとしてのアイデンティティに移ってきた人もいる。13人は結婚経験があり、8人は以前の異性愛関係において子供を有している。

この調査は繊細な問題を扱うため、他の被調査者を介して次の被調査者を求める雪だるま式の方法を用い

て、女性にアプローチした。そのため、筆者は、レズビアンであることを公表している女性だけでなく、自らの性的アイデンティティを非常に用心深く隠している女性や、通常調査から抜け落ちてしまうような女性にも接近することができた。

レズビアンであると自認している女性の認識や経験にのみ注目しているため、本稿では、「ゲイ」と「ストレート」にセクシュアリティが二分されているようにみえるかもしれない。しかしながら、筆者は性的アイデンティティが流動的なものだと考えている。すなわち、広く考えられている異性愛-同性愛というディスコース以外に、多様な性的アイデンティティが存在するのである。例えば、両性愛者は、異性愛者やレズビアン、ゲイの男性によって占有され支配されている環境の中では常に「アウトサイダー」なのである (Eadie, 1992)。

異性愛化された空間

《住宅と家庭》 19世紀、20世紀英国における住宅供給は、「主として、核家族のために設計、建築、融資、計画されてきた——すなわち、異性愛および家父長制を最優先させた家族という文化規範を強化してきた」(Bell, 1991, p. 325) のであり、現在もそうである。例えば、「主の」寝室と子供向けのより小さな寝室といった共通した特徴は、一夫一婦制家族の再生産という文化規範を物理的に表象し強化している。各々の部屋の持つ重要性や使われ方は階級やジェンダー関係の変化に伴って、時代と共に変化しているが(例えば、家事労働の減少と家事の機械化は台所をより「立派な」部屋にした)、住宅設計は、私的化された家族生活形態を表現し続けている (Matrix, 1984)。料理、食事、育児といったすべての仕事が家庭内に包含されているのである。

しかしながら、レズビアンは異性愛カップルと比較すると子供を持たない傾向にある。通常、レズビアンのおよそ 25%だけが育児を行なっていると推定される (Adler and Brenner, 1992)、フェミニスト・ポリティクスに影響を受けた人たちは、一夫一婦制とは異なり、育児や家事を共同して行なう傾向にある (Ettorre, 1978)。けれども、異性愛家父長制でないライフ・スタイルに適したように設計され建設された住宅スト

ックはない。1970年代には、それゆえ、不法居住や集団生活を通して自らの住宅形態を創り出そうというレズビアン・フェミニストの活動が見られた (Egerton, 1990)。

住宅供給もまた不均衡な家族を指向している。多くのレズビアンは異性愛者の女性と同様、経済的に底辺に置かれているが、公共住宅の供給者や管理者は、しばしば、同性の「家族」を認めず、公営住宅のストックが減少しているために、子供のないレズビアンは入居資格を得ることが稀である (Anlin, 1989)。その上、ゲイのパートナーは、パートナーの死後、入居し続ける法的権利を有していない。持ち家を購入できる十分な収入のある女性であれば、住宅市場にアクセスする際の障壁を克服することもできようが、インタビューしたレズビアンの中には、次のようにこぼしている者もいた。住宅の購入が、セクシュアリティの受容度によって影響を受けているというのである。特に、都市にはゲイ・コミュニティがより多く存在するとわかっているため、田舎に住むことを意識的に避けてきたし、そうするであろうというのである。また、都市はより匿名性に満ちたところであると見なされており、それゆえ、レズビアンは、そういった環境の中ではより簡単に自らの性的アイデンティティに対する他者のイメージを操作できると信じている (Valentine, 1993a)。同様に、ブライトンなどの町は、大きな活動的なゲイ・コミュニティがあると思われるのである (Valentine, 1993b)。一方、その他の町は、郊外の家族生活と結びついているために、異性愛的なイメージが抱かれている。インタビューした多くの女性は、友人やゲイの新聞、ヘルプ・ラインを通して、そこに最も活動的なゲイ・コミュニティがあると知ったり、また、そうだと思っていたため、周囲の町から調査地である町へと移動してきたと語った。

リズはロンドンで働いており私はイーストポーンで働いています。私たちは、1週間のうち2、3日をイーストポーンで、また2、3日をロンドンで過ごしています。どこかその間、例えば、ドーキングやチェートシーに住もうかとしばらくの間議論したこともあります。でも、その辺りは中産階級の住む郊外なので…もしドーキングのような所へ移るとすれば、その前はかなり長い間、真剣に考えなければならぬでしょう。あまりにストレートな所ですから。(中産階級、30代)

チェルテンハムで働いていますので、ブリストルの郊外に住んでいました。そこで育ったので、それ以外なかったのです。そのうち、ブリストルにゲイのセンターがあると知り、電話サービスでゲイ・パーについて聞きました…それでこう思ったのです。「街中のどこかに住むところを探そう」と。(中産階級、20代)

居住地の決定はまた、異性愛的な空間をローカルなレベルにおいて認識することからも、影響される。多くの女性は、中産階級の住宅を避けるようにしたと語った。なぜなら、女性二人であると、ほとんどが不均衡な家族から成り立っているような隣近所のなかで目立ってしまい、そのため「居場所がない out of place」と感じるからである。さらに用心深いことには、「異常な」家族だと「目立つ」ことによって、自分たちの住宅が反同性愛者による暴力的になってしまうかもしれないと思っていたのである。このことは、40人中5人の女性がセクシュアリティのため隣人から暴力をふるわれたり嫌がらせに悩まされたりした事実、40人中2人が住宅を襲撃された友人を知っていたり、「汚らしいレズ」というふうにはセクシュアリティについて隣人が攻撃的な言葉を口にするのを小耳に挟んだ女性がいるという事実で反映されている。

ケリソン・アベニューの最初の家にいたとき、私たちはある朝外に出ました。すると、家への通路に「レズビアンがここに住む」と書かれていたのです。(労働者階級、50代)

きっと偏執性になりますよ、どういうことかという、タイヤを切り付けられたらすぐにこう思うのです、「私たちのセクシュアリティのせいだ、なんてこと！ いったい誰がこんなことをしているの？」と。同じ通りに住んでいるサラはいつも困難に見舞われていたのです。当時、彼女はブッチでそのこと(彼女のセクシュアリティ)に関してオープンであったので、庭にくずを捨てられたり、窓を割られたりしたのです。(中産階級、40代)

ちょっと心配の種である隣人がいるのです…私が彼ら(隣人と彼の息子)の所を通り過ぎた時、彼らは「くそつたれ！ ダイクめ」と言ったのです。私はただそれを無視して歩き続けました。彼らがマイク(その二人の男性がゲイだと責めた別の隣人)に嫌がらせをしたり、彼の車やその他のものを壊したりし始めたので(酸をかけたのです)、私は、玄関でエマにさよならのキスをするのにより一層注意深くなりました。犠牲になりたくありませんから。(中産階級、20代)

こういった事件が起こるかもしれないので、インタビューした多くの女性は、意識的に、自らがとけ込みやすいと思われる多様な年齢や人種の入り交じった地区を選択していた。特に、ある住宅地がレズビアン居住ゲッター(制度的なものではないが)であるという評判が高まると(Valentine, 1993b)、結果として雪だるま式の影響が作用するのである。それは、次々と、別のレズビアンが友人の近くの地区に引き寄せられるからであり、また、その隣近所が寛容であると思われるからである。

女性のパートナーと同居している非若年層の女性(30~60才代)は、居場所がないと感じ、外部者として嫌がらせを受けるという二重の危険性を強く意識していた。なぜなら、男性パートナーの不在は、彼女らが明らかにジェンダー役割も同世代の女性に期待されていることも満たしていない、ということの際だたせていると考えていたからである。それに比べ、若年層の女性は、居住地のセクシュアリティにあまり関心を払っていなかった。若いゆえに夫もしくは男性の同居人がいることを期待されておらず、女性二人で住んでいても、大家や隣人は彼女らをレズビアン・パートナーではなく、経済的な理由で共同生活している学生か友人だと思っているからである。

異性愛的なライフ・スタイルが反映されているのは住宅供給面だけではない。家庭というイデオロギーが意味するところもまた、そういったライフ・スタイルが不均衡な家族のあり方に合致していることに負っているのである。家庭は、「家族アイデンティティが存在するところであり、内部で家族関係が演じられる場所」である(Bowlby et al., 1985, p. 8)。家族や育児と結びつくことにより、また、感情的あるいは物理的な暮らしぶりと結びつくことにより、家庭は、安息の場、すなわち、仕事や他人という公的世界から受けるストレスや心配事からの避難場と見なされている。レズビアンにとっては、「ホーム」という私的空間は、安全であると感じることができ、自らのセクシュアリティを暴露されたり暴力を受けたりすることを恐れずに、性的アイデンティティを表明できる唯一の場所である。そこでは、その場への参入や他者の振るまい、その中でセクシュアリティの表現を自らの手で制御できるのである。それゆえ、「ホーム」は自己隠蔽の習慣を

忘れ自分自身であることのできる安息の場なのである。

しかしながら、夫婦や両親の家に住んだり、そこを訪れたりするレズビアンにとっては、「家庭」という異性愛的な家族を基盤としたイデオロギーは自分たちを心理的に疎外する場所にほかならない。多くのレズビアン（性的指向を公にしている人も秘密にしている人も）が、異性愛的でジェンダー化された関係に準じていないので、拡大家族が支配する異性愛家父長制的な家庭のなかにおいては特に、不均衡な「家族」アイデンティティにそぐわないと感じている。

家族を愛していれば愛しているほど、しっくりこないといつも感じています。気が休まる唯一の場所は、ゲイの人たちと一緒にいるときだけです…家族みんなと部屋にいながら、私自身がその一部でないように感じます、うまくあわないのです。まるで台の上に置かれたかのように感じるのです。私が他の人よりきれいだというわけでもないのに、みんなが私を見つめていて、私は決してみんなに溶け込めないと感じるのです。(労働者階級、30代)

普通のストレートな世界が押し寄せてきて大変なのです。例えば、両親の家に帰るようなとき、妹は夫を連れて来るし、いとこ達もやって来ます。もちろん、みんな私が知る限りストレートな生活を送っています。そんな時、今はもうあまり感じていないけれど、かつて他のみんなのようになるとがんばっていた時がありました。家族とか、男、女、子どもや諸々のものは、誰にとっても常に幸福なものだということはないと、わかってはいるのですが、他のみんなのようにならなければというプレッシャーを強く感じます。(中産階級、30代)

家族とともに家庭にいながら居場所がないと感じるのは、親族たちがあからさまに異性愛的振る舞いをしたり、異性愛的な儀式を行ったりするからだけではなく、家族のメンバーすべてが、反ゲイ的な感情を共有し、反ゲイ的な考えで結びついていることを当然のことのように思っているからである。結局、レズビアンにとって、両親や夫婦のいる家庭は、異性愛者には当然のものと思なされるところであるだけでなく、家族という不均衡なアイデンティティを形成し強化するような意味や経験、価値の多くを共有できない所なのである。このようにして、異性愛的な権力は、いわゆる私的空間の中に入り込み、そのような空間を通して表明されるのである。

彼女(母)は、自分の言葉が人を悩ませたり傷つけたりしていることをわかっていないのです。いつも彼女は孫たちのことを話題にするのです。私に対してはもっと気を使ってほしいのです。なぜなら、私は子供の話をいつだって聞きたくありませんから。母はまだ私が治るかもしれないと思いつけています。「あなたもいつか赤ん坊を持つことでしょう」。恐ろしいことです、だから、私は家庭から遠のいているのです。(中産階級、20代)

16才の時以来、どんな時にも男がいたことはありません。でも、父はクィアやレジーについて話すのです。私の目の前でさえも。ミッシェル[ハートナー]と私がそこに座っていて、気分が悪くなりました。そして思ったものです。「なんてこと！ちゃんと分かっていないにちがいない、そうでなければ私たちにそんなことを言うわけがないのですから」と。(労働者階級30代)

異性愛家父長制的な家庭は個人のアイデンティティ形成にかかわるような関係や行動、感情が入り交じったものを表象しているため、そのような家庭から距離をおいた多くのレズビアンにとって、「ファミリー・ホーム」は自分たちが望まないもの、もしくはそうなれないようなものを象徴している。

例えば、家庭というものは、自分自身のアイデンティティを環境に反映させることのできる場所の一つであると、考えられている。しかしながら、両親や友人と住んでいる若いレズビアンや、レズビアンであると自認しつつ彼女のセクシュアリティに気づいていない男性パートナーと生活している女性にとって、「家庭」は、他者である異性愛者によってコントロールされ、プライバシーや不可侵性が欠如しており、アイデンティティが隠蔽されたり抑圧されたりするところであるというに等しい。例えば、レズビアン関係の書物や恋人の写真を隠したり、男性スターのポスターなど異性愛的なイメージを飾って用心深く偽りの姿を見せようとするのである。同様に、清掃人や建築業者、各種メーターの検針者、訪問者などの異性愛者の世界が、レズビアンに支配下にある家に入ってくる時、レズビアンであることを示すものを隠したり、あるいは、家の中で仕事をしてくれるゲイの職人を雇ったりして、自らのホームの不可侵性を維持しようとする女性もいる。

自らのセクシュアリティを親族や男性パートナーに公表することを選んだ人は、家族や夫婦の家庭から排

除されたり、親族から拒絶されたり、子供の養育権を失ったりする危険を抱えている。

私が同性愛という不治の病に侵されていることほど悪いことはない、母は言いました。彼女はメロドラマのように動揺していましたので、私は長い間実家に帰ることができませんでした。私がレズビアンなので、胃に穴が開くほど悩んでいると、父も言っています。(労働者階級、20代)

両親はそのことをかなり深刻に受け取りました。父は、一生勤当すると言いました。母はあまりに動揺したので、友人にも親戚にも言うことができず、ただ涙に暮れていました。(労働者階級、30代)

家庭は、安息の場、すなわち、社会でレズビアンが経験する様々なプレッシャーを和らげるところというにはほど遠いものである。異性愛家父長的権力が夫婦や両親のいる家庭を覆っているために、家庭は、家族の異性愛的なアイデンティティに従うように、また、レズビアンとしてのアイデンティティを隠蔽するようにと、圧力をかけるところなのである。親族を喜ばせ、その人たちに従おうとして、ゲイの女性の多くは、遺憾に思いながら、異性愛的な関係の中に押し込められている。それゆえ、多くのレズビアンにとって、家庭とは心寄せるところではなく、心の底からこみあげる願望を表現するために逃げ帰らなければならない場所なのである。

《職場》 アメリカで行なわれた同性愛者に対する態度に関する調査によると、回答者の25%がゲイの周囲で働くことを強く拒絶しているという。さらに27%はゲイと一緒に働きたくないという (Herek, 1992b)。同様に、1980年代初頭に行なわれた640の大学の社会学部長に対する調査では、その63%が同性愛者であるとわかる者を雇用することを控えているという (D'Emilio, 1989)。英国の統計もまた、差別がごく一般的に行なわれていることを示している。レズビアン雇用権利団体は次のことを明らかにしている。ロンドンで1984年に質問したゲイの女性171人のうち151人が、職場において何らかの形で反レズビアン的な経験ををしたというのである (Hall, 1989)。筆者がインタビューした40人の女性のなかでも9人がゲイであることを理由に実際に差別されたり、「カム・アウト」

した人が職場で受けた否定的な仕打ちを目撃している。そのため、レズビアンは、雇用者が同性愛を否定的で劣ったものと見なしているをよく知っているのである。職場で「カム・アウト」している3人のレズビアンのなかの1人は、次のように語っている。

職場の人たちはもうすでに、彼女を排除し、迫害しました…経営陣が右寄りの中産階級で頭の固い頑固な人たちで、そういうこと(セクシュアリティを公表すること)が嫌いで、彼女に嫌がらせをしたので(彼女はそうだとはいいます)、彼女はそこで働くことができなくなり、私たちの雇用者も彼女を引き留めなかったのです。…彼らは男女平等の方針を持っているにもかかわらず、私たちを支えてくれはしません。それは書かれた紙ほどの価値もないのです。また別の人は、明らかに昇進をストップされ、多くの研修を受けさせてもらっていません。彼女は明らかに頭打ちにされているのです。私はというと、あまりに精力的な人間なので、そのままここで朽ち果ててしまうだろうとしばしば販売部長に言われています。(中産階級、30代)

病院に勤務していたとき、ゲイの看護婦と一緒に働いたことがあります。…みんなは彼女をあしざまに言いました。「知ってると思うけど、彼女はレズビアンなのよ」(嘲ったような声で)と。彼女はいい人だったけれど、みんなが見ていたのは、いつもレズビアンであるという側面だけでした。彼女が一人の人間であるということではなく、彼女がレズビアンであるということだけしか見ていなかったのです。(労働者階級、30代)

ゲイの女性がいます。彼女はキャンパリー(別の支店)で働いていましたが、私は彼女に関する恐ろしくひどいことを聞いたことがあります。本当に彼女のセクシュアリティを否定したようなことです。彼女は技術面ではずば抜けてすぐれていました。私がコンピューター関連の仕事をして、彼女がコンピューターのコースを教えていた時のことです…私が席に着いていたとき、別の男性が彼女をどう思うかコンピューターに尋ねていました。彼がこのコースを教える彼女の能力について尋ねていたことは明らかでしたが、コンピューターは迎刃を見渡してこう言ったのです。「彼女はすばらしいレズビアンだ」と。あまりに不公平です。私ならそんなことを言う人を憎むでしょう。だから、私は、公にはカム・アウトしていないのです。(中産階級、20代)

しかしながら、職場におけるセクシュアリティは雇用者の態度によってのみ制限されるものではない。組織そのものが性を超越したのではなく、異性愛的な

のなのである。生産に携わる組織全体が、再生産にかかわる社会組織と平行して発展しているのである。それゆえ、異性愛家族が、「労働者が意欲的に働くために必要とする安寧や休養、レクリエーションを供給すること」によって労働組織を補完すると考えられている一方、「ゲイの生活様式は、異性愛家族のように安定した活力源を与えるものとは見られていないのである」(Hall, 1989, p. 126)。同様に、多くの組織が労働者とその家族に対して温情主義的な対応をとっている。それは、例えば、会社が生命保険や個人健康保険、その他様々な給付を異性愛家族にだけ与えることにも反映されている。それゆえ、雇用者は、職場において、特有の権力関係、すなわち、異性愛的関係を組織し示しているのである。

最近昇進したので社用車を使用する資格を与えられました。それで、(保険をかけることのできる)別の運転者を申請するこの書類をもらいました。配偶者の名前を書くのです。私は「嘘をつきたくない」(笑い)と思ったので、上司にこう言いました。「友人の名前を書いてもよろしいでしょうか」。上司はそうさせてくれませんでした。それで私はそのことをマネージャーに話しました。「ほら、これは独身者に対する差別です。なぜ別の運転者の名前を挙げてはいけないのです？」とうとう会社はそれを受け入れました。が、ジュリアは配偶者代理として記入されたのです。もうそれで、私がダイクであることは明らかです。(中産階級、30代)

同様に、ジェンダー役割や振る舞いに対する期待もまた、職場に持ち込まれている。Nieva and Gutek (1981, p. 59)が、「性的役割の流出」と述べた過程のことである。例えば、近代西洋文化において、女性はその家庭内役割に関連した性格としばしば結びつけられる。すなわち、受動的で人の世話を焼きたがり感情的で小綺麗で清潔だというのである。一方、男性は、汚く危険で独断的だとされている。その結果、職場では男女の補完的な役割を伴う不均衡な構造が展開され、それは、男らしさと女らしさの形成に影響を及ぼしているのである。このような構造は時と場所に応じて変化するが、男らしさと女らしさという二分法や、その間に生じる父権的な関係が再生産されているのである (Cockburn, 1983)。それゆえ、このような方法で個々の仕事がジェンダー化され、職場において、異性愛家父長制的ヘゲモニーが効果的に維持されているのである。そのた

め、技術者など「男性的な」仕事を行なう女性は、ブッチであるとか、レズビアンだとかレッテルを貼られる危険がある一方、看護のようないわゆる「女性的な」役割を果たす男性は、女々しい、あるいはゲイだと見なされるのである (Bowly et al., 1987)。レズビアンやゲイのセクシュアリティは、それゆえ、職場において、異常なもの劣ったもの、あるいはせいぜい個人的な問題として納得されるのである (Burrell and Hearn, 1989)。

職場の(異)性愛化は、仕事面での不均衡なジェンダー化に限定されるものではない。Gutek (1989)はSchneider (1982)の調査を引用して次のように述べている。女性の外見や服装、振る舞いは持って生まれたものだと見なされている。「そのようなものだと思うため人々は女性のセクシュアリティに気づき、それが普通で自然なものであり、女性であることの当然の成り行きであると気づくのである」(Gutek, 1989, p. 60)。それゆえ、意図していないにもかかわらず、女性の振る舞いや服装はしばしば男性によって性的に解釈される (Abbey et al., 1987)。例えば、化粧をしないとか、いちやついたり、男性の誘いに応えないなど、期待された女らしさに従わない女性は、レズビアンである、すなわち、不運な二流の女性であるというレッテルを貼られる危険性がある。

対照的に、Gutek (1989)は次のように主張している。様々な方法で仕事に性が持ち込まれていることが調査結果 (Gutek, 1985; Hearn, 1985)から明らかにされているにもかかわらず、男性は性的なふるまいをしていないと、一般には考えられているというのである。女性と無理矢理性的関係を持つとしたり、そのため仕事をやめさせようとするセクシャル・ハラスメントは極端な例である。よく見られることであるが、日常会話の中で卑猥な言葉や当てこすりやふざけたり、性的魅力に話題を向けて女性に自分のための仕事をさせようとすることによって、男性は、職場で異性愛を表現している。Gutek (1989)がいうように、そのような行動は性的なものとは解釈されず、ごく普通の男性の行動として、すなわち、独断的で支配的でパワフルな男の行動として見なされるのである。それどころか、性的だと思われるような行動をとる男性は、「女性にやさしい」と見なされるのである。

男性に対して性的魅力を示したり、男性の社会的性

的な行為の相手をするために、女性は、職場で自らのセクシュアリティを上手に操らなければならない(Kanter, 1977; Sheppard, 1989)が、「ふしだらな女」というレッテルを貼られたり、セクシャル・ハラスメントを「助長している」と非難されないように過度に性的になってはいけない。しかしながら、レズビアンであると知られると、女性はこのような異性愛化されたやり取りに加わることができない。自らの性的アイデンティティを公表していない女性はインタビューに答えて次のように語った。家父長制的な職場でうまくやっていくために、例えば、化粧をしたりスカートをはいたり、男性に性的関心があるように装ったりするなど、女性的なアイデンティティに従うことによって、異性愛者としてやり過ぎなければならないという圧力を感じているというのである。自分たちにとって意味がないジェンダー・アイデンティティを採用した結果、レズビアンたちは職場において居場所がないと感じている。そのようなごまかしは次のことをも意味する。職場においてレズビアン同士が互いを認めあうのは容易なことではなく、その結果、ますますゲイが孤立させられ、同性愛者が隠蔽されているのである。

職場におけるこのような社会的性的行動は、性的なレッテルが貼られた従業員間の不均衡な関係に限られるものではない。個人のプライベートな生活や経験までもが、職場という公的な領域において、同僚、とりわけ女性の間で共通の話題として取り上げられるのである。例えば、異性愛者は余暇をパートナーのように過ごしたかということ話をし、結婚の難しさや満足感について共有し、電話で恋人と自由に話をし、写真や結婚指輪といった異性愛者であることを示すものを見せびらかしている。このように、大部分の職場は物理的にも社会的にも人々の多数が持つイデオロギーや社会関係を反映しているのである。また、このことは、従業員全体の異性愛的アイデンティティを強化しているのである。

私の会社の大部分は女性ですが、彼女らは全くストレートなのです。彼女らの話すことと云ったら、みんな、血も凍るようなこと、夫、子ども、結婚式、洗礼式についてばかりなのです。大変皮肉なことです。なぜなら、私はレズビアンですが、ほとんどの時間を男性と過ごしているのですから。(労働者階級、30代)

私の職場では、みんな男友達や夫のことを話題にします。

楽しい週末だったとか、これをした、あれをしたという風に。私は何も言えません。何も言わないことは大変困難なことなのです。なぜなら、私は極めて外向的な人間で、自分を押し殺さなければならないからです。大変困難なことなのです。土曜日にパーティーに出かけるようなとき、彼女らはこう言います。「週末に、ミスター・ワンダフルに会えるかもよ。」私は、「そんなことないわ」と言います。そうしたら彼女らはまた言います。「何を着ていくのかしら、きれいなドレスをもう買った?」「いいえ」と私は言います。そして月曜日になるとすぐさま言います。「週末、楽しかった?」(労働者階級、40代)

異性愛者が自らのセクシュアリティを公に表現することを当然のことと見なし、いわゆる公私の二分を越境している一方、レズビアンは職場外でのプライベートな生活を秘密にしておく必要があるため、同僚から疎外されるのである。公私のアイデンティティを分かつ最も一般的な使い古された戦略は、職場でパートナーのことやパートナーとの関係についての話題を避けることである(Valentine, 1993a)。その結果、レズビアンは、家庭と職場という社会関係の間にある物理的境界線が破られないようにしなければならないのである。例えば、同僚を家に招待しない、異性パートナーと出会うようなイベントには、雇用者が企画したものであれ、同僚間で企画されたものであれ出席しないようにするのである。このことにより中立的な、もしくは無性的な状態であり続けることができるかもしれないが、インタビューした女性が言ったように、個人的な問題や経験を他者と共有できないために、孤立感を味わうのである。より深刻なことには、仲間に入れないことのために、よそよそしく見られ、同僚と真の友情を取り持つことができなくなり、その結果、同僚との職場関係やネットワークの可能性がむしばまれてしまうこととなりかねないのである。

既婚者は子どものことばかり話すので、私は閉口して何も言えません…「ねえ、先週の金曜にすごいゲイ・パーティーがあったの。40人の女性が集まってとても楽しい時を過ごしたの」とは言えないのです。あなたでもそのようなことを言えないはずですよ。自分の中にしまいこんでしまおうでしょう。(労働者階級、50代)

みんなが夫やパートナーについて、また何をしたとかどこに行ったとか話している時、私は自分の生活について話せないのです。だから、同僚と真の友人関係を築くこ

ともなかったのです。一つには、私自身の生活について話すことのできない部分が大きいということが理由だと思っています。彼女らは私が自分自身のことを隠していると思っているのでしょうか。それで私は完全に混じることができないのです。例えば、職場のパーティーには全く行きませんし。(中産階級、30代)

セクシュアリティはレズビアンが同僚と真の関係を持つのに障害となるという主張は、「カム・アウト」し、同僚との関係が深まったという女性の証言によって裏付けられる。

私は職場でひどくフラストレーションを感じていました。なぜなら、そのことがあまりにも不公平だったからです。職場で生活に関して誰とも分かち合うことができなかったため、私には生活がないと言うに等しかったのです。職場で、他の人たちは週末の出来事を共通の話題にしているのです。…でも昨年、みんなにそのこと(レズビアンであるということ)が知れ渡りました。数年たって急に、あらゆる人、そして母親がそのことを知り、私はそれについてどのように感じればよいかわかりません。そのことが私を人間的にしたと言われます。私が多くのことを開けっぴろげにし自分自身のことについて話すようになったので、みんな、私に対してずっと暖かく接することができるようになっていきました。(中産階級、30代)

しかしながら、次のように言う女性もいる。公表することによってこのようにすばらしい関係が築かれるにもかかわらず、異性愛が圧倒的の優位にある以上、彼女らがなお疎外されているというのである。なぜなら、差異が容認されても、異なるということが何を意味しているかということに対してはなんら気を使わず、レズビアン性のセクシュアリティや関係がおおっぴらに認められることは滅多にないからである。その代わりに、女性たちは「名誉異性愛者」になりつつあるのだと語った。同僚と一緒に「異性愛者の」会話に加わったり、他の同性愛者に対して反ゲイ的な意見を出したり、あからさまに毛嫌いしたりするのである。

私は会社のベツ・ダイク、そうみんな思っています。でも、本当は、ダイクであるという違いがあるにもかかわらず、私がストレートにであるかのようにみんなは思っているのです。ダイクであることは私にあらゆる差異を課していますから。みんなは私に、男や子供の話をし続けます。みんな、私がどんなふう感じているかとい

うことを完全に忘れがちなのです。(中産階級、20代)

多くのレズビアンにとって、職場は無性な環境としてではなく異性愛的な環境として経験されているのである。なぜなら、職場は物理的にも社会的にも不均衡な社会的性的関係を反映し再生産しているからである。空間において異性愛家父長的な関係が表現され表象された結果、異性愛者の従業員は、(異)性愛化された記号、会話、行動を通して、集団として空間を占有しているのである。

《社会空間》 異性愛が家庭から職場へ浸食しているのと同様に、それはまた、ホテルやレストランなどの社会空間にも浸透している。とりわけ、ホテルには二重のイメージがある。第一に、ホテルが、休日に、家族にとって家庭の代替になり、異性愛的な家族に関係しているのである。第二に、ホテルは、姦通や「汚らしい週末」のための場所として、特定の(異)性愛的関係を持つ寝室の代わりなのである。

それゆえ、レズビアン・カップルは、ダブル・ベッドの部屋を予約する二人の女性間に性的関係があるということを暗示しているということに気づいている。ピンク・ペーパー(1991)の調査によると、同性カップルに対して満室だからといって予約を拒否する一方で、次に来た異性愛者には部屋を提供したホテルがあったと報告している。インタビューした女性の一人は、このような方法で拒否されている。しかし、他の人たちも、部屋を断られるかもしれないと心配し、予約してはいけないのではないかとためらったと語っている。

ガール・フレンドと一緒になら、ヒルトンやそういったホテルに入っていけないでしょう。「こんにちは、私はダイクです。泊めてちょうだい」というようなものですから。私はもっと慎重です。外出するときは、私たちはシングル・ルームを予約するようにしています。ストレートなところに行くこと、ダブル・ベッドを予約することに大変気を使っているのです。(中産階級、40代)

オーストラリア人の彼女(ハートナー)が田舎を見たかったので、バスとウェールズを巡る小旅行に出かけました。私たちは、ストレートなB&Bに宿泊しました。私が入って行って尋ねました。交代でそうしようとしていたのですが、彼女が大変恥ずかしがったので、私が入って尋ねました。だって、二人で入って行って、ダブルベッド・ルームはありますかと尋ねたくなかったので

す。それで、私が部屋を予約したら、外に出て、荷物を持って、二人とも女性だと気づかれないことを願って二人で階段を駆け上がります。(労働者階級、20代)

ホテルやB&Bの受付は支払い能力のある客なら誰でも予約を受け付けているかもしれないが、他の宿泊客や従業員は差異に対して非寛容であることが多い。インタビューした女性は、他の客に凝視されたり、話題にされたり、言葉で嫌がらせを受けたり、また、乱暴な従業員に脅迫されたことがあると語っていた。男性パートナーがいないこと、女性的でない外見、親しげなボディ・ランゲージや行動によってレズビアンであると思われたため、このようなことが生じたと考えている。言い換えれば、彼女らは、ジェンダー・アイデンティティに応じた服装や振る舞いをしていなかったというのである。

カレンと私がよそに行く時は、私たちはいつもダブル・ルームを予約します。それでも、人々は私たちを珍しげに眺め、一瞥しこう思うに違いありません。「くたばれ」。(中産階級、20代)

朝食は最悪です。ストレートに囲まれて席に着くのですから。ボーイがスクランブルエッグの皿を情け容赦なく私たちの間に手荒に置いたので、皿で私たちの間が分断されたこともあります。(労働者階級、20代)

敵対的な反応に出会わないにしても、圧倒的な異性愛的環境の中にいる唯一の同性カップルであることを常に意識しているので、ホテルやB&Bにおいて居場所がないように感じているという女性もいる。それに対する共通した対応は、「ストレートな」場所を避け、同性愛者向けの宿泊施設、もしくは同性愛者によって経営されている宿泊施設を探し出すことである。

レズビアンたちは、レストランにおいても、同様に敵愾心あふれる不快な経験をしたと報告している。レストランもまた、ホテル同様、親密さと異性愛者の求愛儀式に関係しあった環境なのである。それらはまた、人々がドレスアップし、不均衡なジェンダー役割を反映される場所でもある。例えば、外出するとき、女性は化粧をし装飾品を身につけ、男性はジャケットを着用し、異性愛を強調するのである。その結果、次のように語った女性もいる。女性パートナーと食事をしたとき、「目に付きにくい」悪いテーブルに案内され

たり、従業員によって敵意に満ちたサービスを受けたことがある。また、他の客が彼女らを凝視するので、普通に会話を続けたり、触れ合って親密さを確かめあったりすることが禁じられ、とうていできないことであるかのように感じたというのである。対照的に、既婚女性は、このような敵意に満ちた対応をされたり居場所がないと感じたりすることを恐れる必要がないので、男性パートナーとディナーを共にしながら、自らのセクシュアリティを表現するのを当然のことと見なしているのである。

放り出されたような気分です。私はストレートなところに行くのが嫌いです。本当に嫌い。そういったところに歓迎されていないと感じるので、ストレートばかりいるところ、私だけが浮いてしまうようなところに行くのが嫌いです。女性二人でレストランに行ってみなさい、悪いテーブルにしか座れません。でも、男女のカップルは、店の正面の良い席に座に案内されるのです。バスのすてきなレストランに行ったことがあります。3組の客の他は空いていたのですが、みんなから離れた隅に座らされたのです。誰からも私たちが見えなかったに違いありません。それなのにあまりに邪険に扱われたので、猛烈に怒りました。女性二人で外で夕食をとるのがあまりにも奇妙なことなので、他の人は(私たちのセクシュアリティについて)詮索したりじろじろ見たりするのです。そんなところではやさしくなてなれません。(労働者階級、20代)

外出してカップルでリラックスできる場所なんてありません。ディナーのテーブル越しにキスしたりバブで手を握ったりできる場所なんてありません。屈辱的なことに、高級なレストランに行ってテーブルにつくと、このような障壁が至る所にあり、守りを堅くしなければならなのです。食事を楽しめたとしても…家に帰りたくなります。私自身のホームにいるのが好きなのです。私たちのホームでカップルでいたいのです。(労働者階級 40代)

ホテルもレストランも親密な環境であるが、バブは、とりわけ夜には、伝統的に、男性優位な環境として認知されている。女性がバブに立ち入ることは、道徳と世間体という規範によって、歴史的に制限されてきた。女性がバブに入るためには男性同伴が不可欠で、しかも決められたバブや時間のみに限られていたのである(Green et al., 1987)。今では女性同士でバブやナイト・クラブに行くことも珍しいことではないが、女性一人

でそのようなところに行くことはまだ避けられている。それは、夜間、公共空間を一人で移動することに対する恐怖のために、この種のところに女性一人でいくことが制限されている (Valentine, 1992) からだけではなく、そういったところに一人でいる女性は、男性からの性的誘惑を待ち望んでいると思われており、それゆえセクシャル・ハラスメントに遭遇する確率が高いからである (Westwood, 1984)。しかしながら、性的誘惑の対象となることを女性が常に望んでいないというわけではない。時に、女性は、新しいパートナーを求めて、積極的に着飾って「女性同士で」パブやクラブに行くからである (Burgoyne and Clark, 1984)。その結果、外見や振る舞いから男性に興味がないことが明らかなレズビアン、また、カップルでいるレズビアンは、異質なものとして目立つのである。それゆえ、レズビアンは、しばしば居場所がないと感じ、男性の敵意に満ちた反応によってよりはっきりとそのことに気づかされるのである。

ある場所にいる時どういう風に振るまったらよいか大変気を遣っています。私はストレートなパブが嫌いです。私たちはいつものような服装をしていると目立ってしまうのです。隅っこで、女らしい女性が踵まで着飾って男に腕の腕に寄りかかっている中に、私たちが入っていくと、みんなじろじろ見るのです。なぜって異質だからです。こういう服装をしていると、私自身、落ち着くのですが、そういうところに行くとき分のよいものではありません。それで、珍しくどこかに出かける時には、ダイクに見えないような少しは周囲になじんで見える服装をします。本当は、そういうことをしたくないのですが。(労働者階級、30代)

女性でいっぱいパブに行くのならおどおどしていません。でも、女性が私たち二人っきりの時ほど、落ち着かないことはありません。以前、サンドラとパブに行ったときのことを思い出します。確かにこう言われたのを聞いたのです。「どっちが男役だ？」それで本当に居心地悪くなりました。(中産階級、40代)

このパブに入っていったとき、本当にショックでした。バーには3人の男がいたのですが、私たちは彼らのところを通り過ぎなければなりません。それに、彼らは、明らかに酔っぱらっていたのです。一人が叫びました。「おっ！ 見る、あばずれレズビアンだ。」本当にショックでした。それから、別の男も言ったのです。「フッキング・ダイクなんてお呼びじゃないぜ、出ていけ」。

(中産階級、30代)

住宅や職場と同様、大部分の社会空間は、異性愛という社会的性的関係を反映し表象するように組織化されているのである。とりわけ、ホテルやレストランは異性愛的なロマンスやデート、セックスに関係した親密な環境である。また、パブやクラブは男性の口説きを受け入れることを女性が了解済みであるか、もしくはそう期待されているような環境である。こういった場所が異性愛カップルのためのものであるため、レズビアンは居場所がないように感じるのである。そしてまた、服装や身振り、男性に対する関心のなさから彼女らをアウトサイダーと見なす人から受ける敵愾心のために、居場所がないように感じるのである。

《サービスおよび商業環境》 大部分の企業が従業員を異性愛者であると仮定し、それ以外に対して何ら規定を設けていないのと同様に、銀行、保険会社、医者といったサービスを提供する公的機関や営利企業もまた、その顧客が異性愛者で特定のジェンダー役割を果たす者であると見なし、それにしがたがって、組織やサービスを編成しているのである。

ひどい生理痛があったので医者に行きました。するとその男性の医者は「活発に性生活を営んでいますか」というようなことを言ったのです。それで私は言いました。「活発な性生活とはどういう意味でしょう」。すると彼は言ったのです。「じゃあ、ボーイフレンドはいますか」と。私は続けました。「いいえ。彼はこう尋ねました、「それじゃあ、性生活を営んでいないのですね」と。私は絶句するしかありませんでした。…ストレートかゲイかというレベルの問題ではなく、ストレートな人の生活に立ち入って問うものだったのです。(中産階級、20代)

ある生命保険を取りに行きました。受取人が誰であるか申告しなければなりません。「配偶者の名前」を書かなければなりませんし、男か女かチェックする欄があります。それは挙げたいと思っている人の名前ではいけないのです。(中産階級、40代)

このように、レズビアンはこの種の暗黙の了解と絶えず衝突し、セクシュアリティに関する情報が悪用される危険にさらされざるを得ない状況に強いられている。あるいは、異性愛者としてやり過ぎさなければならぬのである。そのため、入手できるアドバイスやサー

ビスが無意味になってしまうのである。そういった経験は、日常生活における異性愛へゲモニーを強調するものであり、ゲイの女性は社会の主流から疎外されていると強く感じざるを得ないのである。しっくりこないという感じ方は、美容院などにおいて特に強烈である。そのようなところでは、女性らしさを強調することが異性愛であることと常に手を携えているのである。男女を不均衡に二分することの重要性は、美容室の雰囲気や醸し出している絵画や雑誌、内装にも反映されており、それは、「ボーイフレンドと結婚」という美容師とのお決まりの話題にも表れている。

私は、レズビアンかゲイの美容師の所に行くようにしています。「ご結婚は？ ボーイフレンドは？ 週末はどうされました？」とおなじみの会話をしなくてもすむということは、すてきなことです。(中産階級、20代)

私の美容師はダイクです。彼女の方から私の家に来てくれます。ストレートな美容室に行くのが大嫌いなのです。ほんとに嫌い。もう久しくそんなところには行っていません。行きたくないのです、ほんとにひどいところですから。そんなところへは行きたくありません。そんなところでは、私はカム・アウトしない(セクシュアリティを公表しない)でしょう。居心地が悪くなってしまっただけですから。(労働者階級、30代)

公共空間

どこに行こうが、どこに外出しようが、大いに怒りを感じます。…人前でパートナーと触れ合うことができないなんて、いつも忌々しく思っています。土曜日には他の誰もが手をつないで、腕を組んで通りを歩き、お店に入っていきます。そんなことをやれた試しがないのです。(中産階級、40代)

この引用や本稿冒頭部における引用が示すように、男女の愛情を隠さずに表すことは、にぎやかな中心街などの公共の場においてもごく自然なことである。そういった行為は、暑い夏の日に公園や渚などのオープン・スペースにおいてとりわけ顕著に見られる。

今日、職場から家まで歩いて帰っていました。手をつないだカップルがいたので、私の通り道はふさがれてしまいました。通り過ぎようとしたのですが、彼らはなおも手をつないだままです。私は思いました、「あなた達にはいらいらする、私にはそんなことができない

のですから。もし腕を組んだとしても長くは続けられないのですから」。私たちも腕を組んで歩いたことがありますが、怒鳴りつけられました。(労働者階級、20代)

みんなとチェスターに行ったときのことで。ジャニスもダイアナもキャロラインも私もみんなゲイです。私たちは道を歩いていました。ジャニスとダイアナは前で腕を絡ませて、キャロラインと私は後ろで手をつないで歩いていました。老夫婦が私たちの方に歩いてきました。二人は腕を組んでいました。ジャニスとダイアナのところを通り過ぎると、振り返って口をあぐり開けて言いました、「まあ、なんてこと！」と。キャロラインは「あなた方も腕を組んでいるじゃない、それが大問題だって言うの？」と切り返したのです。(中産階級、20代)

不均衡なカップルや家族が公共空間を占拠してしまうのが当然のことと考えられているため、レズビアンは、彼らと同じように空間を手に入れることが不可能であり、疎外されてしまうのである。しかしながら、以下の引用が示すように、レズビアンやゲイ、両性愛者のコミュニティが行動を起こし、その存在が可視化されるとき、レズビアンたちは公共空間を占有することができるようになる。このようなやり方で異性愛者に対して形勢を逆転させることによって、ゲイ・プライドは、空間が性愛化されていること、正確に言うところ、「通常」異性愛化されていることを指し示している。

この6年間、私はほとんどのゲイ・プライドに参加しています。そのような群衆の中にいることはすてきなことで、その日一日、マイノリティじゃないと心から感じるのです。例えば、地下鉄に乗ると、他のみんながゲイなのです。地下鉄の中にいるストレートな人間は少数で、その人たちはこう感じるのです。「あら、まあ！ ゲイに取り囲われているよ」。そして、その変化に対して居心地が悪くなるのです。(中産階級20代)

自らの関係を公共空間において露わにしているレズビアンは、暴力の危険にさらされている。女性に対する性的嫌がらせ同様、言葉による嫌がらせや脅迫、襲撃、殺人に至るまで、反ゲイ暴力も存在する。Kelly (1987) が指摘するように、あまりにも頻繁に起こるような暴力は、他の形の暴力よりも深刻なものではないと考えられてはいるが、性暴力はより軽微なものから深刻なものへと段階を追って考えられるものではない。なぜなら、個人的な背景や起こった事件の認識の仕方が違ってくると、暴力の経験に対する反応もかわ

ってくるからである。特に、攻撃は被害者の意識の中では連鎖的な反応を引き起こす、すなわち、ある攻撃の次に別の攻撃に続いて起きるといのである (Warr, 1987)。例えば、言葉による嫌がらせは、しばしば身体的な襲撃の前触れとなる。「小さな」事件は、「より深刻な」ことが起こるかもしれないということを暗示している。そのため、しばしば心的外傷になるのである。

インタビューした 40 人の女性のうち、75% はセクシュアリティを理由に少なくとも一度は言葉による嫌がらせを受けており、3 人は追いかけられたり脅されたり襲撃されたりしている。また、大部分の女性は、襲撃された人のことを知っており、一人はヘルプ・ラインの仲間が殺されたという。

以前、C」(ゲイ・ディスコ) から出てきたとき、車で追いかけられたことがあります。男たちの集団が私とパートナーに近づいてきたのです。彼らはレズビアンであることでいちゃもんをつけてきました。彼らはこう言っていました。「お前らに必要なのは、いいスクリュウだけだ」。私は言いました、「あっちに行って」。私は自分の車に乗り込みました。彼らも自分たちの車に乗りました。本当に追いかけてくる気だとわかりました。私はぐるぐると町中を走り回り、彼らは私についてきて、窓を開けてあらゆる限りの嫌がらせを大声で叫んだのです。(労働者階級、50 代)

公園と一緒にいったとき、公園にいる悪ガキから不快な事件に遭遇させられました。私たちはピクニックをしようとしており、子供たちは私たちが互いにかなり愛情を抱いているということがわかったのでしょうか。たぶん、単なる友人どおしのピクニックよりそうだったのでしょうか。今までにそれほどまでに卑わいな言葉を聞いたことがありませんでした。子供たちは、本に出てくるようなあらゆる悪口を使ったのです。本当に動揺しました。(労働者階級、20 代)

リサと私はパブに入っていく、何か飲もうと思っていました。そのうち、ビリヤードをしようという気になりました。私たちがゲームをしている間、かなり大柄な女性とその取り巻きの男たちがしかめっ面で私たちを見ていました。私たちは少しはそのことに気づいていましたが無視してゲームを終え、その場を離れました。すると、彼らがついてきたのです。私たちは、何とか、姉の家を駆け込みました。彼らはドアを蹴り続け、恋人のバイクを庭の小道に引きずり倒し、何百ポンドもの被害を引き起こしたのです。私たちはこちこちになるくらい怯えて

いました。彼らはレズビアンに関する猥褻な言葉を大声で叫んでいました。私は、やっとのことで裏窓から這い出て、庭を横つ飛びに突っ切って、誰か電話を持っている人を捜しました。それでやっと警察に電話できたのです。(労働者階級、30 代)

これらの数字は、サンフランシスコにおける 400 人のレズビアンに関する研究と比較すると低い数値を示している。その研究によると、84% が反ゲイ的な言葉による嫌がらせを受け、57% が身体的な暴力で脅され、12% が殴打されたり蹴られたり打ちのめされたりしたというのである (von Schilthess, 1992)。このような暴力は増加傾向にある。1986 年から 1987 年にかけてフィラデルフィアでレズビアンとゲイの男性を対象に行なわれた調査では、Gross ら (1988) は、次のことを指摘している。セクシュアリティのために暴力犯罪にあった人の数は 1983 年から 1984 年における前回の調査時 (Aurand et al., 1985) と比べると 2 倍に増加しているというのである。

女性が思い出した 61 の事件のうち、84% は「普通の」公共空間で起きたもので、ゲイ・パブの外のようにならぬことがわかる場所で起こったのは 16% にすぎない。1 件をのぞくすべてが、男性か少年によって引き起こされたものである。女性たちによると、手をつなぐなどして愛情を表現しているように見られ、その結果ゲイであると知られたために公衆の面前での嫌がらせを受けることもあるし、男性の性的誘惑に 대응せず、その結果レズビアンであると咎められたために引き起こされたものもあった。しかしながら、このことは、意図的に鋭く観察した結果というよりむしろ、自らのマスキュリティに疑義が唱えられていると感じた男性から、性的不感症と女性を呼ぶのと同様な性的侮辱として行なわれていたのかもしれない。しかしながら、14 人の女性が語っているように、自分たちが受けた事件に対する唯一の説明は、髪が短いかかズボンをはいているとか、最も多いもので女性と一緒にであるという事実には過ぎない。彼女らが、異性愛者の女性が「普通の」公共空間で期待されている服装や行動に従っていないことを意味しているのである。このことは、ゲイの男性が受けた被害に関する調査と対照的である。その調査において、男性は、主としてパブやゲイの徘徊地域などゲイ空間において、(ここでも女性ではなく男性から) 襲撃されるのであり、ゲイである

ことがわからないような空間においてではない(Berrill, 1992)。

レズビアンへの攻撃とゲイの男性への襲撃の間に、地理的差異があるということは、次のようなことを示している。すなわち、反レズビアン暴力は、ゲイの性的アイデンティティ表現を取り締まろうという異性愛者による企てであるだけでない。男性は一人もしくは男性どうしをしているときにはセクシャル・ハラスメントに怯えることなく、公共空間を自由に占拠することができるのに対して、男性の同伴者がいない女性は、外見に対する言いがかりや男性からの性的誘惑に常にさらされているということをも反映している (Valentine, 1989; Westwood, 1984)。公共空間において女性向けられた反レズビアン嫌がらせは、男から独立した女性の行動を取り締まろうとする男性の意図を反映するもので、それゆえ、家父長的な権力関係をも反映しているのである。

61件の事件のうち、警察に通報されたのは1件だけである。他の調査結果においても同様の結果が見られるように (von Schltess, 1992)、反ゲイ嫌がらせの被害者は、性暴力の対象となった女性同様、警察や刑事裁判によって二重に被害を受けたり (Comstock, 1989)、問題が公けになると続いて雇用者からも被害を受ける恐れがあるということを反映している。プール・バーでの事件に巻き込まれた女性は、次のように続けた。

私たちは彼らを刑事裁判に訴えましたが、彼らは罰金から逃れたのです。私の姉も恋人も私自身もみんな目撃者として喚ばれました。彼らの弁明は、あらゆることをねじ曲げて、こうだったのです。レズビアンであるということが暴露され、実質的には私たちに罪があるということです。警察権力に名乗り出た結果が、こうなのです。(労働者階級、30代)

それゆえ、インタビューした女性の大部分は、性的アイデンティティを隠蔽し、反ゲイ嫌がらせを避けるために、自らの行動を修正している。例えば、異性愛カップルが当然のこゝろに行なっている愛情表現を避け、異性愛者が優勢な公共空間における愛情表現も避けている。

飛行場で二人のレズビアンを見つけるのは簡単です。なぜなら、お互いに決して触れ合わないからです。10 フィ

ート離れて立っている、さよならの抱擁もキスもしない。唯一の人たちですから。(中産階級、40代)

通りでは手はつなぎません。ゲイの場所以外では、ゲイであることを示すような大げさな身振りをしません。そうする勇気がないのです。(労働者階級、50代)

結論——(異)性愛化された空間

職場仲間の間で、他の人たちはよく言います。「それはあなたがたレズビアンの見方ですね」。でも、彼らは自分たちもまたある特定の見方をしているとは決して思っていない。彼らのは、漠然とした「それ」なのです。また、彼らは私に、白人か、男性か、異性愛者か、そんなこと考える必要はない、私は私なのだといいます。でも、それは、彼らが白人で、男性で、異性愛者だから、そんなことを何も考える必要がないから言えるのです。自分が何者か、他の人たちは何者かということについて徹頭徹尾考えなければならないのは、そうでない人たちだけです。だから、かれらは、自分たち自身が、「その」ひとつの見方とは別の見方をしていっているとは決して思っていないのです。彼らが持っているのは、多様なものの中における一つの見方なのではなく、「それ」なのです。(中産階級、30代)

本稿で示してきたように、異性愛が近代西洋文化において優勢なセクシュアリティであることが確認された。このような優位性は、出産と結びついているため、異性間セックスが自然なものであり、同性愛よりもすぐれたものであるかのように考えられてきたということに起因している (Burrell and Hearn, 1989; Schneider and Gould, 1987)。しかしながら、異性愛は私的空間における性行為にのみ限定されるものではない。先の引用が示すように、それは、大部分の日常的な環境において作用している権力関係の当然視された過程であり、性的に公私が二分されるという想定が誤りであると強調している。

異性愛は空間が物理的・社会的に組織化されるなかで表面化する。住居から職場、レストランから保険会社に至るまで、(異)性愛化された空間は不均衡な家族という単位を映し出し支えているのである。異性愛以外の性的アイデンティティがあるということを認識しないために、場所や組織はレズビアンやゲイのライフ・スタイルを排除し、無意識のうちに異性愛者へゲモニーを再生している。空間において異性愛関係が表現・表象された結果、パートナーの写真などで異性愛

者であることを示したり、いつも(異)性愛化された会話をし、異性愛者は一つの集団となって空間を私物化し占拠する。このように全体として異性愛を指向しているにもかかわらず、職場や家は無性なものと考えられている一方、ホテルなどの社会空間には、一般的に、レズビアンの利用を露骨に禁止し制限するような(異)性愛的関係があると考えられている。

空間が異性愛者のために組織化され異性愛者によって占有されており、不均衡な社会的性的関係が表現、再生産されているために、レズビアンは居場所がないように感じ、したがって、異性愛の優位性が永続しているのである。その結果、レズビアンは、自分たちが帰属できない(異)性愛化された空間で過ごす時を最低限にしたり、落ち着くことのできるゲイ空間や自らが創り出した空間の中で社会生活をおくれるようなところを選択する。より陰険なことには、異性愛ヘゲモニーは同性愛恐怖症を通して維持され管理されているのである。同性愛恐怖症は、厳密にいうと、同性愛者に対する恐れを意味するが、より一般的には、同性愛者に対する憎悪や否定的な扱いを意味する。この中には、レズビアンやゲイの男性、両性愛者の人たちを抑圧するような拒絶行為、差別、さらには暴力の行使が含まれている。多くのゲイの女性は、そのために、そのような敵意にさらされる可能性のある環境では、自らのセクシュアリティを公表することを避けているのである。このようにして自分の性的アイデンティティを隠しているため、レズビアンは日常環境の中で見えなくなっているのである。公けにされることを恐れているため、次の3つの方法で、異性愛の空間的優越性が助長されることとなる。第1に、実際に存在する多くのレズビアンを隠蔽してしまい、その結果、諸環境において異性愛アイデンティティを強化することになる。第2に、レズビアンについての否定的なステレオタイプを永続させることになる。第3に、ゲイ空間以外でレズビアンが他のレズビアンを認めたり出会ったりすることが困難になり、ゲイのセクシュアリティを囲い込んでしまうのである。

しかしながら、引用したインタビューが示唆しているように、レズビアン・アイデンティティはホモフォビアだけでなく家父長制によっても管理されている。異性愛はイデオロギーの点において、ジェンダー・アイデンティティ(男らしさと女らしさ)と結びついて

いる。なぜなら、異性間関係は、男であるということと女であるということとの間に二分された相違があることを前提としているからである。男らしさと女らしさは男性優位を築き永続させるために、互いに関連しあいながら構築・再構築されてきており、現在もなお継続されている(Coveney et al., 1984)。とりわけ、女性は外見や行動において先天的に性的な存在であり、最近の分析では、男性に服従するものと見なされている。それに対して、男性の性的行動は支配や権力の点から説明されるのである。このようなジェンダー・アイデンティティの不均衡性は互いの性に起因すると考えられている行動や服装の面において、反映されている。女性は男性が性的魅力を感じてくれるような服装をすること、男性からの性的誘惑や会話に応じること、夜間に一人で公共空間に行ったり、パブのような特定の男性優位の環境に同伴者なしで行かないことを避けることが期待されている。近代西洋社会において異性愛は、家父長制的であり、男性支配を反映しているのである。

このことは1970年代にすでに、フェミニストによって認識されてきたことである。レズビアン主義は、「フェミニズムは理論、レズビアン主義は実践」というスローガンのもと、ラディカル・フェミニストによってひとつの政治的選択として考えられていた。Bunch(1991, p. 320)が言及しているように、「レズビアン・フェミニズムの政治学は、男性優位性を基盤とする異性愛イデオロギーやその制度を政治的に批判していこうというものである。それは性的ポリティクスの分析からそれて制度としてのセクシュアリティそのものの分析へと拡大されていった」。

レズビアン・フェミニストは、それゆえ、「男らしさ/女らしさという対のうち女性的な(劣った)側面」(Young, 1990, p. 74)としての女らしさの概念や女性そのものの概念を批判してきた。メディアは、家父長制の覇権的な力や不均衡な家族に対する挑戦もしくは脅威としてレズビアン主義の主張を捉えてきた。その結果、男らしさや醜さと同義であるだけでなく、「男嫌い」や攻撃性とも同義のものとして、レズビアン主義はメディアや大衆文化の中で描かれ創造されているのである(Young, 1990)。

男性と結びつくような服装をし行動をし、仕事をし、そういった場所に行く女性は、「ブッチ」であり、「男

嫌いの」レズビアンであるとレッテルを貼られる危険性がある。レズビアンであるということに汚点や否定性が伴うということ、すなわち、「ダイク」であるという批判は自立した女性を自分たちの場所につなぎ止めておくために男性によって行なわれるものであり、また同時に、女性が他の女性に圧力をかけて自分たちと同様の抑圧に従わせようとして行なわれていることである (Bunch, 1991)。このようにして、レズビアン主義という刻印は、家父長制的なジェンダー・アイデンティティを保護するために利用されているのである。その結果、ゲイの女性は比較的男性から独立したようなライフ・スタイルをとっているため——例えば、男性パートナーなしでパブやレストラン、ホテルに行っている——、「ダイク」とののしられることが多いのである。しかしながら、社会・公共空間に関する章で提示してきたように、そういった敵愾心に満ちた批判はレズビアンのセクシュアリティを必ずしも正確に観察して行なわれるのではなく、自立した女性、例えば、男性が期待するような女性らしい服装や振る舞いをしない女性に対する悪口に過ぎないのである。

それゆえ、レズビアンは、いくつかの環境において、居場所がないと感じ、また、差別や暴力の恐れを感じている。それは、同性愛者であるレズビアンを「他者」と見なす同性愛恐怖症のせいだけではない。男性から比較的自立し家父長制ヘゲモニーに対する脅威となる女性であるからといって、家父長制の側から向けられた反発のせいでもある。このため、レズビアンの中には、「ダイク」と非難されないように、極めて女性的で異性愛者的な服装で行動することを強られる者もいる。様々な空間においてこのような見せかけの性的アイデンティティを装うため、ゲイの女性は他者と真の関係を築くことができず、そのため仕事上の関係、社会関係、ビジネスのつきあい、さらにはネットワークの可能性まで妨げられているのである。そのようにして、家父長制の下、レズビアンは日常空間においてもまた、不可視な存在であり続け、レズビアン・アイデンティティの表現はゲイ空間もしくは自己創造空間に押し込まれているのである。

同性愛者という「他者」としてのレズビアンは、同性愛恐怖症に示されるように、異性愛者の女性とは異なった形で抑圧を経験しているが、一方では、すべての女性は、また、反レズビアン主義にさらされている。

しかしながら、異性愛者の女性のなかには、自らに課せられた抑圧に従い、反レズビアン主義を無視したり、異性愛の勢力に荷担したりする者もいる。なぜなら、反レズビアン主義は、異性愛女性の服装や行動、活動をも同時に管理下におくものであるからである。したがって、「ダイク」が抑圧的な言葉でなくなれば、異性愛者の女性もまた、自らのアイデンティティをより自由に規定するようになる。しかしながら、実際には、共同戦略を採ることは、異性愛の女性とゲイの女性の利害が大きく違っているために、困難であるというのが現状である。

今後、異性愛家父長制下におけるレズビアン、異性愛者の女性、ゲイの男性、そして両性愛者が持っている複雑で、おそらく背反する経験について調査し、異性愛家父長制ヘゲモニーを批判していく最善の策を強化していくために、より多くの研究が必要である。

謝辞

E S R C (the Economic and Social Research Council) の支援に心から謝意を表す。本研究は、E S R C の助成金 (no.R000 23 3600) を得たものである。また、草稿段階で助言を得た Sophie Bowlby と John Silk、および有益なコメントをいただいた二人のレフェリーに感謝する。

注

- 1) 本文中のインタビューの引用は発言内容そのままである。省略記号は言葉やフレーズが削除されていることを示す。引用文には、年齢、階層のみが記されている。性的アイデンティティやジェンダー・アイデンティティ同様、階層は流動的なものであり、また、個人は複数の階層を保持しようと筆者は理解している (Graham, 1992)。その上、レズビアンとしてのアイデンティティを選び取ったとき女性はライフ・スタイルに大きな変化を受けるため、多くのレズビアンたちの階層は複雑である。したがって、中産階級、労働者階級という用語は、当該女性の現在の職業上の地位を提示するためにだけ使用されている。匿名性を保持する必要から、面接者に関するそれ以上の情報は提供しない。
- 2) 厳密にいうと、同性愛は生物学の用語であり、ゲイという語が同性愛者の男性および女性を指して使用され、レズビアンはゲイの男性から区別をしたいと思っている女性によって使用される。しかしながら、レズビアンよりむしろゲ

イと呼ばれることを好む女性がいる一方で、その逆も見られる。それゆえ、本稿では、両方の語をあらゆる同性愛者の女性を指し示すために適宜交換しながら使用した。その他、使用した用語は次の通りである。「カム・アウト」－セクシュアリティを公表すること；「ストレート」－異性愛者を意味するゲイ用語；「ダイク」－異性愛者がゲイに対する嫌がらせとして用いる。レズビアンが肯定的なラベルとして用いることもある。

- 3) 偏見、差別、暴力を恐れ、多くのレズビアンは同僚、友人や親戚に自らの性的アイデンティティを隠している。被調査者の匿名性を保護するために、調査地や本稿で言及した人名・地名は変えてある。
- 4) 61 という数字は、インタビューの中で述べられた事件の数である。しかしながら、思い出すには多すぎるくらい事件があったという女性もいた。その上、ありふれた経験として「慣れてしまっている」ため、回答には「小さな」事件が現れてこないという調査者もいる。

参考文献

- Abbey, A., Cozzorelli, C., McLaughlin, L. and Hamish, R. (1987): The effects of clothing and dyad sex composition on perceptions of sexual intent: do women and me evaluate these cues differently? *Journal of Applied Social Psychology*, 17, pp. 108-126.
- Adler, S. and Brenner, J. (1992): Gender and space: lesbians and gay men in the city. *International Journal of Urban and Regional Research*, 16, pp. 24-34.
- Anlin, S. (1989): Out but not down! The housing needs of lesbians. Homeless action, 52 Featherstone Street, London EC1Y8RT.
- Aurand, S., Adessa, R. and Bush, C. (1985): Violence and discrimination against lesbians and gay people. available from Philadelphia Lesbian and Gay Task Force, 1501 Cherry Street, Philadelphia PA19102.
- Bell, D. (1991): Insignificant others: lesbian and gay geographies. *Area*, 23, pp. 323-329.
- Berrill, K. (1992): Anti-gay violence and victimisation in the United States: an overview. in Herek, G. and Berrill, K. (eds): *Hate crimes: confronting violence against lesbians and gay men*. Sage, London, pp. 19-45.
- Bowlby, S., Foord, J. and Macdowell, L. (1985): *Love not money: gender relations in local areas*. Paper presented at the 5th Urban Conflict and Change Conference, available from Bowlby, S. Department of Geography, University of Reading, Reading.
- Bowlby, S., Foord, J. and Lewis, J. (1987): *Gender and place*. Paper presented at the Association of American Geographers Annual Conference, Portland, OR, available from Bowlby, S., Department of Geography, University of Reading, Reading.
- Bunch, C. (1991): Not for lesbians only. in Gunew, S. (ed): *A reader in feminist Knowledge*. Routledge, Chapman and Hall, Andover, Hants, pp. 319-325.
- Burgoyne, J. and Clark, D. (1984): *Making a go of it*. Routledge, Chapman and Hall, Andover, Hants.
- Burrell, G. and Hearn, J. (1989): *The sexuality of organizations*. In Hearn, J., Sheppard, J., Tancred-Sherif, P. and Burrell, G.: *The sexuality of organization*. Sage, London, pp. 1-27.
- Butler, J. (1990): *Gender trouble: feminism and the subversion of identity*. Routledge, Chapman and Hall, Andover, Hants.
- Cockburn, C. (1983): *Brothers: male dominance and technological change*. Pluto Press, London.
- Comstock, C. (1989): Victims of anti-gay/lesbian violence. *Journal of International Violence*, 4, pp. 101-106.
- Coveney, L., Jackson, M., Jeffrey, S., Kay, L. and Mahony, P. (1984): *The sexuality papers*. Hutchinson Education, London.
- D'Emilio, J. (1989): Not a simple matter: gay history and gay historians. *Journal of American History*, 76, pp. 435-442.
- D'Emilio, J. and Freedman, E. (1988): *Intimate matters: a history of sexuality in America*. Harper and Row, New York.
- Eadie, J. (1992): *The motley crew: what's at stake in the production of bisexual identity*. Paper presented at the Sexuality and Space Conference, London, available from Bell, D., School of Geography, University of Birmingham, Birmingham.
- Egerton, J. (1990): Out but not down: lesbians' experiences of housing. *Feminist Review*, 36, pp. 75-88.
- Ettor, E. (1978): Women, urban social movements and the lesbian ghetto. *International Journal of Urban and Regional Research*, 2, pp. 301-336.
- Foucault, M. (1988): *Technologies of the self*. In Martin, L., Gutman, H. and Hutton, P. (eds): *Technologies of the self: a seminar with Michel Foucault*. Tavistock Publications, Andover, Hants, pp. 16-49.
- Graham, J. (1992): Post-Fordism as politics: the political consequences of narratives on the left. *Environment and Planning D: Society and Space*, 10, pp. 393-410.
- Green, E., Herbron, S. and Woodward, D. (1987): *Women, leisure and social control*. in Hammer, J. and Maynard, M. (eds): *Women, violence and social control*. Macmillan, London, pp. 75-92.
- Gross, L., Aurand, S. and Adessa, R. (1988): *Violence and discrimination against lesbian and gay people in Philadelphia and the commonwealth of Pennsylvania*. available from Philadelphia Lesbian and Gay Task Force, 1501 Cherry Street, Philadelphia PA19102.
- Gutek, B. (1985): *Sex and the workplace: impact of sexual behavior and harassment on women, men and organizations*. Jossey-Bass, San Francisco, CA.
- Gutek, B. (1989): *Sexuality in the workplace: key issues in social research and organizational practice*. in Hearn, J., Sheppard, J., Tancred-Sherif, P. and Burrell, G.: *The sexuality of organization*.

- Sage, London, pp. 56-70.
- Hall, M. (1989): *Private experiences in the public domain: lesbians in organizations*. in Hearn, J., Sheppard, J., Tancred-Sherif, P. and Burrell, G.: *The sexuality of organization*. Sage, London, pp. 125-140.
- Hart, R. (1978): *Children's experience of place*. Irvington Press, New York.
- Hearn, J. (1985): Men's sexuality at work. in Metcalf, A. and Humphries, M.: *The sexuality of men*. Pluto Press, London, pp. 110-128.
- Herek, G. (1987): Can functions be measured? a new perspective on the functional approach to attitudes. *Social Psychology Quarterly*, 50, pp. 285-303.
- Herek, G. (1992a): *The social context of hate crimes: notes on cultural heterosexism*. in Herek, G. and Berrill, K.(eds): *Hate crimes: confronting violence against lesbians and gay men*. Sage, London, pp. 89-104.
- Herek, G. (1992b): Psychological heterosexism and anti-gay violence: the social psychology of bigotry and bashing. in Herek, G. and Berrill, K.(eds): *Hate crimes: confronting violence against lesbians and gay men*. Sage, London, pp. 149-169.
- Kanter, R. (1977): *Men and women on the corporation*. Basic Books, New York.
- Kelly, L. (1987): The continuum of sexual violence. in Hammer, J. and Maynard, M.(eds): *Women, violence and social control*. Macmillan, London, pp. 46-60.
- Matrix(ed)(1984): *Making space: women and the man made environment*. Pluto Press, London.
- Nieva, V. and Guetek, B. (1981): *Women and work: a psychological perspective*. Praeger, New York.
- Pink Paper(1991): *Pink Paper: the national newspaper for lesbians and gay men*. September, p. 3.
- Plummer, K. (1988): *Homophobia, homosexuality and gay youth. in Family, gender and welfare*. Open University Press, Milton Keynes, pp. 23-43.
- Schneider, B. (1982): Consciousness about sexual harassment among heterosexual and lesbian women workers. *Sociological perspectives*, 27, pp. 443-464.
- Schneider, B. and Gould, M. (1987): *Female sexuality: looking back into the future*. in Hess, B. and Ferree, M.(eds): *Analysing gender: a handbook of social science research*. Sage, Newbury Park, CA, pp.120-153.
- Sheppard, D. (1989): *Organizations, power and sexuality: image and self image of women managers*. in Hearn, J., Sheppard, J., Tancred-Sherif, P. and Burrell, G.: *The sexuality of organization*. Sage, London, pp. 139-157.
- Valentine, G. (1989): the geography of women's fear. *Area*, 21, pp. 385-390.
- Valentine, G. (1992): *Coping with fear of male violence: women's use of precautionary behaviour in public space*. Paper presented at the Women in Cities Conference, Hamburg, Germany. available from Valentine, G., School of Geography, University of Manchester, Manchester.
- Valentine, G. (1993a): Negotiating and managing multiple sexual identities: lesbian time-space strategies. *Transactions of the Institute of British Geographers*, 18, pp. 237-248.
- Valentine, G. (1993b): *Out and about: a geography of a lesbian landscape*. copy available from author.
- von Schlthess, B. (1992): *Violence in the streets: anti-lesbian assault and harassment in San Francisco*. in Herek, G. and Berrill, K.(eds): *Hate crimes: confronting violence against lesbians and gay men*. Sage, London, pp. 65-75.
- Warr, M. (1987): Fear of victimisation and sensitivity to risk. *Journal of Quantitative Criminology*, 3, pp. 73-79.
- Westwood, S. (1984): *All day, ever day*. Pluto Press, London.
- Young, A. (1990): *Femininity in dissent*. Routledge, Chapman and Hall, Andover, Hants.

解題 (福田珠己)

G・バレンタインは、近年のフェミニスト地理学を代表する研究者の一人である。これまで、セクシュアリティの地理学、犯罪の恐怖（特に女性を対象にした）、そして育児と子供についての多くの研究を発表している。とりわけ、本論文を含むセクシュアリティに関する研究は、1993～1995年にかけて集中的に発表されている。

本論文は、同性愛者、特にレズビアンが日常、空間をどのように認識し経験しているかということについて、詳細なインタビューを通して明らかにした研究である。言い換えると、sense of place という語こそ使用されていないが、場所の意味をめぐるレズビアンたちの諸経験が論じられているのである。従来の研究においては、空間の占有あるいは支配がジェンダーの産物であると議論されてきたが、バレンタインは、それに加えて、異性愛の産物でもあると主張している。ジェンダーのみならず、セクシュアリティを視野に入れた地理学の可能性を提示しているといっても過言ではなからう。しかしながら、セクシュアリティとジェンダーは全く異なった次元で議論されているのではない。本論文でしばしば使用される用語「異性愛家父長制 heteropatriarchy」に代表されるように、いずれも、近代西洋社会の中で、男性支配を反映し再生産してきた

権力関係の一過程として捉えられているのである。

本論文のもう一つの特徴は、レズビアンを軸に議論が進展していくところにある。バレンタインは、インタビューという手法を駆使する研究者である。近著「Methods in Human Geography: a guide for students doing a research project」(Flowerdew, R. and Martin, D. 編)において、インタビューについて論じていると同時に、勤務するシェフィールド大学においても、定質的手法について講じていることから、語りを重視していることが窺えよう。このことはバレンタインの研究態度を如実に表している。決して自らの存在を棚上げすることなく、対話を通してコミュニティや日常空

間を問い直しつつ、研究が遂行されているのである。このような研究は、また、私たち読者に自省の機会を突きつけている。少なくとも本論文は、異性愛者で日本社会の中に生きる訳者に、自らを省みながら女性の語りに耳を傾ける機会を提供してくれた。決して、論文という枠の中に収まる研究ではないのである。

近年、日本においても、同性愛に関する言及が散見されるようになってきた。セクシュアリティに関する関心も高まってきている。日常空間に対する同性愛者の認識や経験を取り上げた本論文が示唆に富むものであることは、いうまでもない。